

# 浜松市 教頭会 会報

## 第38号

発行 平成30年11月9日

編集 浜松市教頭会会報委員会



連絡先 TEL 053-447-0129

浜松市立新津中学校 山口 俊二

## 新任校長随想

### 「経験は糧」

浜松市立西小学校校長 加藤 志緒里



校長となって半年が過ぎました。この間、「判断をする」ということが様々な場面で求められました。今、改めて思うことは、これまでのすべての経験が私の判断に少なからず影響を与えているということです。

中でも、教頭時代の経験が持つ意味は大きいと感じます。自校の校長と間近に接する機会が多く、折々の判断とその根拠を直に受け止める立場にいたからです。例えば、教職員とは違う視点で思考・判断される校長からは、「教師だからそう考えるのだろうけれど、一般の人は違うよ。」ということをよく言われました。

「目から鱗が落ちる」という思いを何度も経験して、鱗の数が随分減りました。長く教育の世界に身を置くと、どうしても教員目線が染みついてしまいがちです。「こうあるべき」とか、「こう考えるのが当たり前」的に考える私がいたのです。もちろん、私たちは専門職ですから、その立場で子供をどう育てていくかという明確な考えを持つことは大事なことです。しかし、子供たちを育てている保護者の多くは教員ではないのです。今の時代に何をどう感じ、どう考えているのかということを加味して考えることを、私はその校長から学ばせていただきました。

ですから、教員でない人と話をしたり食事をしたりする時間は、とても貴重だと感じます。

また、職員の失敗に対して温かく対応することの大切さについても同様でした。職員の話をよく聞いた上で、指導はするけれど、決して上から目線で怒らない。「あなたのためにならない。」という立場で話されていました。校長の受容的な人柄が醸し出す空気のおかげで、職員は伸び伸びと活動していました。心配事があれば、隠さずに声を出す雰囲気がありました。だから、日々いろいろな問題が起こっても、意見を出し合いながらチームでその事案に対応していく学校でした。

恥ずかしながら、教頭だった私は、その経験が後にどう役立つかなどと考えていたわけではありません。今になって、そのときの経験が糧になっていると実感しているのです。もちろん、教頭時代だけでなく様々な年代に経験したことが、今の私の思考につながっています。だからこそ、日々の様々な事柄に真摯な気持ちで応じることが大事だと遅まきながら実感しているところです。

昨日は今日の糧。明日は今日が糧になる…毎日忙しくて、目の前の事案に対処することに終始しがちですが、たまに深呼吸してこんなふう考えるようにしています。素敵な経験はもちろんのこと、どんな辛い経験も無駄にはなりません。必ずいつかは自分の糧になると考え、これもありだな…と思うとちょっぴり元気になりますよ。

## 「地域と学校の関わり」

浜松市立三方原中学校 校長 水野 貫一



この4月から校長を拝命し三方原中学校に勤務しております。本校は昭和59年に北星中学校から分離し、今年で35年目を迎えています。かつて初生小学校に隣接した地に初代の三方原中学校があり、北星中に統合された後にまた分離するといった珍しい歴史を持っています。開校時に「学校名はどうしたらよいのか」ということを地域で議論し、最終的には住民の投票によって「三方原中」となりました。当時を知る人は「母校がなくなった旧三方原中の卒業生の思いが強かった」と語ってくれます。

多くの方が承知の通り三方原は開拓によって発展をしました。昭和27年代後半から、全国から幅広く人々が集まってできた地域であり、歴史が浅く人のつながりが薄いという課題も抱えていました。当時の教育後援会長の荒井義夫さんは、教育機関・学校の活動を通して地域の活性化を図ることを期待しました。

また、初代校長の山崎芳男先生は開校に際し、次のことに配慮されました。

「地域の願いをくみ取り、地域の歴史を踏まえ、その中で教育の観点を捉えること」

「地元とコミュニケーションというキャッチボールをすること」

地域と学校の思いを重ねながら三方原中は進化・発展して行きました。しかし、決して順風満帆とは言えず、この35年間で幾度となく生徒の問題行動が多発しました。その都度、学校と地域が連携してその対処に当たる歴史を繰り返してきました。

問題行動対処の一環として15年前から自治会が中心となり、地域の有志の方が交通指導を通学路で行うことが毎日継続されています。旗振り活動で子供たちの交通安全を見守りながら、声掛けをしていただいています。そのことで子供たちは「地域から守られている。大切にされている。」と感じ、自己の存在感や有用感が育っています。

私事になりますが、10年前に本校に3年間勤務しました。交通指導の有志の方々と同じメンバーで活動を続けておられ、着任当初の4月には懐かしい思いがしました。門の前で一緒にあいさつ運動をすると、「先生のことは覚えているよ。あの時は世話になったね。」と言って私を温かく迎えていただきました。本当にありがたいことです。「いつも朝早くからありがとうございます。」とお礼を言うと、「旗振りがあるから毎朝元気に起きられる。子供たちの明るさに元気ももらっているから楽しいんだよ。」という前向きな言葉が返ってきました。

荒井さん、山崎先生の言葉、そして旗振りをしている有志の方々の変わらない姿を見て、学校は教員のものではなく、子供たちや地域のものであることや、その子供たちや地域の思いを受けて私たち教員の存在があることを再認識しました。実際に教員は異動してしまい子供たちの将来すべては見届けられません。

浜松市でも、平成32年からコミュニティスクールを、本格的に導入する計画が進められています。モデル校を中心に、課題の検討と条件整備が推進されていますが、一番肝要なことは地域や地域の人たちが「学校は私たちのもの」と意識することではないでしょうか。

現在本校はかつての荒れている中学校の印象はかなり薄くなっているのですが、私は安泰とは考えていません。管理職として常に危機感を持って学校経営を進めています。特に重点は「地域とのコミュニケーション」「地域の願いや要望の察知」だと考えます。教育課題を地域とともに乗り越えた歴史、これを継続することが盤石な学校経営やその運営体制につながることを確信しています。

教育界においても、差し迫った課題として「働き方改革」が話題に上ります。今回の会報では、実際に各校行われている実践と試行が始まっている「タイムカード」について紹介します。

### ☆各校で実際に行われている取り組み例

- ・ 退庁時刻を職員室に明示
- ・ 部活動の活動日削減（小学校）
- ・ P T A行事の大幅カット
- ・ 職員会議の回数削減
- ・ 年休取得推進（校内リフレッシュ休暇）
- ・ 夕方の決められた時刻に音楽やチャイムを放送
- ・ 会議の精選や会議時間の厳守（ex.40分会議）
- ・ 成績の二期制（前期後期制）
- ・ 市教研の日の確実な定時退庁

### ☆タイムカードについて

写真右上が「タイムカード読み取り機」です。ホワイトボード用のペンと比較していただくとおわかりかと思いますが、思ったより小さな機器です。写真右下が「タイムカード（ICカード）」です。出勤退勤時に機器にカードをかざすようにして使用します。機器の設置場所やカードの保管については、導入校で若干の違いがあるようです。

現在は、モデル校として試行している状態なので、従来通り出勤簿への押印も行われているそうです。

タイムカード導入により、時間外勤務が減少したり、一人一人の「タイムマネジメント」への意識が向上したりするメリットが現れてきたようです。一方、導入当初のちょっとしたトラブルや、事務的な手続きの煩雑さなどの新たな側面もあるようです。取材は夏期休業中です。今後、機器や手順に慣れていく中で、課題が解消されると思います。試行している学校の実践から、「働き方改革」へのヒントが見えてくるのではないかと思います。



読み取り機



ICカード

「働き方改革」は、単に早く退庁することだけが目的ではありません。教員一人一人が仕事の質を高め、生産性という意識を向上させ、ワークライフバランスを適正に保つことで、仕事に一層のやりがいを感じるようになることが目的だと思います。教育界が魅力ある職場であることは、「教員になりたい」と考える人材を増やし、将来の教育界に有能な人材を継続的に呼び込んでいくことにつながります。「ブラック」という言葉が与える負のイメージは想像以上に大きなものがあります。教育に関わるすべての方が協力して「明るく元気な学校」にしていくためにも、効果的な「働き方改革」を進めていきましょう。

# 新任教頭随想

## 「新任教頭として」

浜松市立中ノ町小学校 安藤 靖之



中ノ町小学校は、国語科の研究発表を30年以上にわたり継続している伝統ある学校です。保護者や地域の方がとても協力的で、地域と学校が連携して子供を育む体制ができている地域です。子供たちは、明るく朗らかで活発、とても素直な印象です。

この伝統ある学校に、初めて教頭として赴任することが決まったと聞かされたとき、私は、正直言って大きな不安を感じましたが、与えられた職責を全うできるよう、精いっぱい務めようと思いました。

そんなとき、自分が大切にしていた言葉を思い出しました。新採として赴任した小学校の、校長室に飾ってあった色紙の言葉です。

「その一人のために教育はある」

この言葉のような教育を実践しようと、学級担任として、クラスのすべての子供たちに目を向け、関わり、寄り添っていこうと努力してきたつもりです。



ある先輩の先生から、「教頭は、職員室の学級担任だ」「なぜ、教頭の机が職員室の中央にあるか考えてみなさい」と言われました。管理職という立場をいただいた今、「その一人のために教育はある」という言葉を、今度は学校の職員に置き換えて、職員一人一人が精いっぱい輝き、働きやすい職場をつくり、支えることができるように努めなければならないと感じています。

実際には、理想には程遠く、失敗ばかりのスタートとなってしまいましたが、校長先生や職場の皆さんに支えられて半年間を乗り切ることができました。これからは、自分が、職員や地域から頼られ、それにこたえることができるだけの力をつけなければならないと感じています。職員をしっかりと支え、少しでも地域の役に立てるように努力していきたいと思っています。

## 「地域から愛される学校に」

浜松市立笠井中学校 古川 里江



『朝夕に赤石の 連なる山を望みつつ 清冽玉と砕け散る 大天竜  
の本流に 久遠の生命はぐくみて栄ゆく笠井中学校』

『遠江の古き市 巷に人は溢れつつ 文化も華と咲きかおる 遠き伝統受けつぎて  
いよよ栄ゆるこの里に 輝く笠井中学校』

創立72年を迎えた、笠井中学校の校歌の1番と2番です。この歌詞が学区の歴史と特徴をよく表しているように感じます。江戸時代は、織物とそれを背景にして発生した笠井の市が発展し、浜松と並んで繁栄を極めました。文化面でも、国学者、俳人、画家等を輩出し、特に俳諧では遠州の中心地でした。

生徒は郷土の俳人「松島十湖」について調べ、親しみを持って毎年行われる「十湖賞俳句大会」に全校生徒が作品を応募しています。

歴史ある笠井中学校に勤めて半年が過ぎようとしています。一日一日の時間が過ぎる

のが早く、本当にあつという間の半年でした。教頭としてどれだけの働きができていたのか、またできているのか大変不安ですが、まずは信頼される教頭になりたい、と一つ一つの業務に誠実に向き合ってきたつもりです。

笠井中学校区は、地域における教育力が高く、同時に学校に対する高い期待もあります。教頭は学校の玄関で、学校と地域をつなぐ大切な役割があります。「地域の中の学校」という視点を忘れず、まずは地域の方の顔と名前を覚え、同時に自分の名前と顔も覚えていただくよう、会えば大きな声で笑顔の挨拶を心掛けてきました。

昨年度までと業務内容が一変し、生徒と直接触れ合うことが少なくなりました。寂しい気持ちもありますが、自分のする仕事が生徒の笑顔につながっていると信じ、与えられた業務に日々邁進していきたくと思います。また職員室にすることが多いからこそ、何かあったときに機動力を発揮できるはずです。遅刻して職員室を訪れる生徒、具合が悪くて職員室を訪れる生徒など、今までの集団を対象としてきた生徒指導から個人とのかかわりを大切にしたい生徒指導を行っていきたくと思います。

「玄関から職員室に来るまでにすべての生徒さんがあいさつをしてくれましたよ」「優しくて素直な生徒さんが多いですね」来校されるお客様や地域の方からの言葉が、生徒や職員にとって何より励みとなり、誇りとなっています。支えてくださっている地域の方や周囲の方への感謝を忘れずこれからも地域に愛される学校をめざし努力していきたくと思います。



## 「どんな人になりたい？」

浜松市立中郡小学校 須藤邦夫

2018年は平昌オリンピック・ジャカルタアジア大会と、今年に入って大きなスポーツの祭典が続きました。スポーツ観戦が好きな私にとっては、充実した長期休業となりました。メダルの色に一喜一憂しながらも、選手の言動から、その選手の人柄や魅力を分析し、勝手にメダルの色に付加価値をつけている自分がいました。

羽生選手は他の様々な国のスケーターが憧れる存在であるのを見て、日本人が個人で世界に通用する時代が到来したようでとても誇らしく感じました。

小平選手が韓国選手を抱きしめたシーンは、国籍関係なくお互いをリスペクトできることに感動しました。

高梨選手が銅メダルに輝いた瞬間、もう一人の代表選手の伊藤選手が真っ先に激励した姿に、人に応援されること、人を応援することの素晴らしさを感じました。

ノルディック複合の渡部選手は、最後の1周を正々堂々勝負するために、互いに先頭を滑り風よけになったそうです。その潔さに驚きました。

アジア大会での100m走で銅メダルに輝いた山縣選手は「9秒91はそんなに離れた存在ではなかった」と自信に満ちた姿に、夢を叶えてくれる期待感でいっぱいになりました。

テニスプレーヤーの大坂選手は、プレーは日本人離れしていますが、インタビューの言葉は日本人らしさを表現してくれたようで、とても好感がもてました。

世界の舞台で活躍するスポーツ選手は確実に増えています。よい成績を収めること自体も嬉しいことですが、それ以上に日本人が個の力をいかに発揮できるようになったことが、子供たちに「勇気と希望をもち、夢に向かって努力する素晴らしさ」を示し



ているようで、さらに嬉しくなります。それは、自己肯定感が低く、社会貢献度を感じない「負」の日本人らしさを覆す姿だと感じるからです。

サッカーW杯で、日本は残念ながらベスト 16 で敗退しましたが、選手はロッカールームをきれいに掃除し、感謝のメッセージを残して帰りました。サポーターが観客席のゴミを拾う話も有名です。国際的に日本人のパーソナリティーが認められ、日本人らしさを誇れる機会が増えるにつれ、日本人のもつ道徳心が世界をリードし始めたように感じます。教育現場では生徒指導をはじめ課題は山積みですが、代々受け継がれてきた教育は誇らしいものであると改めて感じます。そして、2020 年の東京オリンピックにおいて、日本人の素晴らしさを再確認するよい機会になってほしいと願わずにはられません。



4月から中郡小学校は「午前5時間授業」「高学年による教科担任制」「放課後子供教室の実施」など新たな取り組みを始めました。新たなことに取り組むために、職員一人一人に課せられた負担は初めは多少大きくなったように感じました。しかし、先生方はそれ以上に有り余る使命感を発揮するにつれ、これらの改革の意味を理解し、日に日に余裕と活気が満ちてきているのを実感します。我々職員が新たなことにチャレンジすることで自己有用感を高め、教育効果に波及していきたいと思ひます。

私はそんな活気に満ちた職員集団の要でいられるよう、そして、自分自身のパーソナリティーが社会で通用するよう、日々笑顔を忘れずにいたいと思ひます。

